

宗教と云う事

新興宗教に関して、色々な問題を耳にします。

今回、山上容疑者による安倍元首相の暗殺事件という悲惨な結果の元凶となってしまいました。

そこで、今回は日本人と宗教に関して考えてみたいと思います。

世界には、国それぞれに様々な宗教があり、その中でもキリスト教、イスラム教、仏教、ヒンズー教を世界4大宗教とよびます。

日本人は、神社に初詣に行き、仏滅や赤口を嫌い鬼門を避け、クリスマスを祝って、教会で結婚式を挙げ、お寺で葬儀をして等、自分達は基本的には宗教を信仰しない、無宗教な民族であると思っています。

しかし、これは大きな思い違いです。実はほとんど全ての日本人が信じている信仰が在るのです。

これを此処では仮に『縁起でも無い教』と呼びましょう。

世界4大宗教では、それぞれ神学者がおり、古来から教義を洗練化し、専門の学習の場が造られてきました。そして、社会活動を通して他の宗教と接するという対立により、例えば、自分はキリスト教徒であると自覚するのです。

もし、世界にキリスト教しか無ければ、水や空気のように其処に在るのは当たり前で、自分はキリスト教徒であると自覚することは無いでしょう。

この『縁起でも無い教』は、非常にプリミティブな概念のため、他の宗教と対立すること無く、専門の神学者もおらず、修行する場もないため自分が『縁起でも無い教』の信者であることに気が付かないのです。

それではこの『縁起でも無い教』の教えは何かというと、それは縁起でも無いことを忌避するということです。

縁起でも無いことを口にするとその凶事は実現すると恐れ、忌み言葉というものを作りお目出度い席では、発言することを禁じられています。

井沢元彦先生は日本は‘言霊の国’だと言われており、日本人は口にしたことは現実になると恐れ、縁起の悪い言葉は慎み縁起の良い言葉を連発します。

宗教の目的は何かと言うと、それは人々の救済にあります。(多くの場合、それは精神的な救済ですが・・・)

『縁起でも無い教』の救済方法とは、縁起の良いことをどんどん取り込んで、縁起の悪いことを排除するという事です。

古事記や日本書紀では天皇家は神々の子孫で在り、本来なら日本人は天皇家を崇拝するのがスジです。

この日本古来の神々を崇める思想を洗練したものが神道であり、日本中に神社が祭られています。

しかし、日本の多くの家庭では仏壇が置かれお盆やお彼岸など仏教的行事が行われています。神棚の設けられた家庭より仏壇の設けられた家庭の方が多いのでは無いでしょうか。

本来、神道と仏教は別の宗教であり、古代の支配者である天皇家は仏教の日本への浸透を阻止するのが自然です。

ところが、日本に積極的に仏教を導入したのは天皇家なのです。

天皇家と云えども『縁起でも無い教』に骨がらみになっており、その救済の一手段として仏教の導入を図ったのです。

決して仏教に帰依して『縁起でも無い教』を棄教したわけではありません。

多くの人はお葬式から帰って来て自宅に入る前に塩を撒くと思いますが、これは神道の考え方です。神道では死骸は穢れている（死穢）という考えがあり、清めの塩により穢れを払うとされています。

仏教には死穢という考えはありませんから、仏式のお葬式の後に塩を撒く必要は無い訳です。これを見ても仏教と神道がごちゃ混ぜになっていることが分かります。

戦後西洋文化と触れる機会が多くなり、キリスト教徒の催すクリスマスが縁起が良さそうに見えたので、広く大衆に普及するようになりました。

元々関西地方の風習であった恵方巻も縁起が良さそうだと、今では全国区となっています。日本人にとって‘いわゆる宗教’と呼ばれるものは、『縁起でも無い教』の救済のための手段に過ぎません。

日本人で純粋なキリスト教徒や仏教徒は1%も居ないでしょう。

恐らく、山上容疑者の母親も強烈な『縁起でも無い教』の信者だったのでしょう。

不幸な事件が度重なる内に救済の手段を求めたのでしょう。

そこに統一教会が入り込む隙があったのでしょう。